

社報 御霊本宮

第78号

発行者

御霊神社本宮
宮司 藤井利夫
五條市霊安寺町
0747-23-0178

発行日

令和3年
5月15日

疫神信仰

古事記には疫病に関する記述がありません。

崇神天皇の御代（三世紀半ば）、「大（おお）疫病が大流行して、国民が絶滅しそうになりました。それで天皇は、これを嘆いて、神意を請うための床についた夜、大物主大神が夢の中に現われました。

「疫病の流行は私の意志によるのだ。だから意富多々泥古という人に、私を祭らせれば、神の祟りは起こらなくなり、国内も安らかになるだろう」と言いました。

ただちに意富多々泥古を神主として、三輪山に意富美和之大神を齋き祭られました。これによって疫病がすっかりやんで、国内は平穏になりました。

た。

六世紀には疱瘡（天然痘）がはやり、疱瘡が疫病として怖れられました。以来、疱瘡神が祀られるようになりました。

平安時代には、悪疫鎮圧の神として牛頭天王が都に勧請されました。牛頭天王はインドの祇園精舎の守護神でしたが、素戔嗚尊と習合し、八坂神社の祭神となりました。京都の祇園祭は悪疫退散のための祭りであることがご承知の通りです。

大物主大神は「疫病の流行は私の意志によるのだ。」と言っています。つまり、疫病を起こすのは神の仕業であるのです。しかしまた、悪神であっても丁寧に祭れば鎮まるとも言っています。これが疫神信仰です。崇り神を祀ることで守護神とした御霊信仰と同じ思想であることが分かります。



牛頭天王と素戔嗚尊が
習合した祇園大明神

疫神を居住区から追い出す「疫神送り」「疫神流し」という行事があります。

愛知県新城市作手地区では、小麦を紙に包んだものを竹の先に挟んで門に立て、疫神を祓います。岐阜県飛騨市神岡地区などでは、藁で作った舟を作り疫神をその藁舟に移して川に流し、その後、茅の輪をくぐって後ろを見ずに帰ります。兵庫県姫路市家島

では、小形の舟を作って村内を担いでまわり、病人のいる家で疫神を遷した藁人形を舟に乗せて海に流します。ひな流しや、大祓などに共通する悪霊払いの行事です。

現代のように医療が発達した時代でも、アマビエが話題になるなど、疫神信仰が伝わっています。

宇智郡 狛犬めぐり

今井町 荒木神社

荒木神社
には、拝殿
と本殿の間
にも狛犬が
あります。



参道はかなり長く、昔は神域が広大であったであろうと想像できます。この参道の狛犬は、たてがみが胴のかなり下まで流れるようにあります。そして耳は垂れ、尾は背にべったりとついています。阿形は舌を出していて、どこもなくユーモラスです。吽形には角がありまです。二体とも風化が進んでいるようで、顔の表情はなんとなく分かる程度です。

本宮所蔵品

御供櫃

五條市指定

文化財です。

普通の桶の

ようですが、

これが文化財

に指定された



理由として、この容器の裏に、年代がはっきりと記されていることでしょう。

「奉施入宇智郡本宮 應永十九壬辰 林鐘朔日 願主 祐榮敬白」と朱の墨書があります。應永十九年は一四二二

五條市指定文化財

市指定文化財には有形文化財三十一件、民俗文化財一件、記念物三件があります。有形文化財には原町の阿陀比丘神社本殿などの建造物をはじめ、絵画、彫刻、工芸品、書籍・典籍、歴史資料の種別があります。民俗文化財は山陰町金剛寺の牛玉印版木、記念物には古墳二件と北山町のかやの木が指定されています。

年で、林鐘は六月の異称であることから、一四二二年六月一日に祐榮という人により本宮に奉納されたことが分かっています。

應永の時代は室町時代前半にあたり、将軍は足利義満・義持・義量で、一四二二年は義持が治めていました。応永十年から二十二年までは戦乱などが途絶え「應永の平和」と言われています。

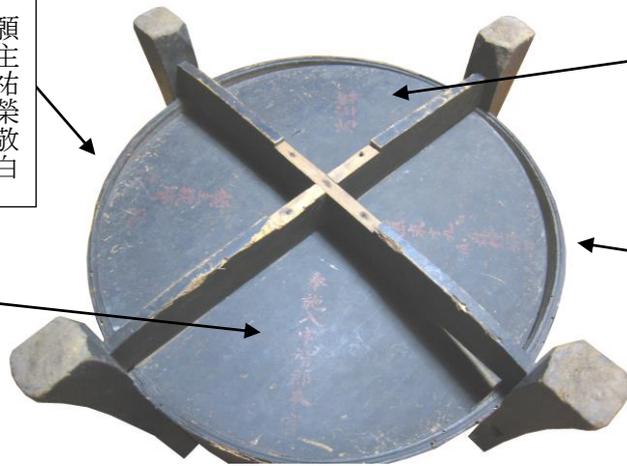
御供櫃は、戦乱が収まったときに奉納されており、本宮のお祭りが盛大に行われたであろうと推測されます。この御供櫃は、餅や野菜、穀類などを山盛りにして神前に供える容器として使用されたものでしょう。

應永十九壬辰林鐘朔日

御供櫃

願主祐榮敬白

奉施入宇智郡本宮



直径 約五十 cm

深さ 約十六 cm

高さ約二十七 cm (脚部含む)

平成八年一月二十四日指定

有形文化財 (工芸品)

八百万の神々

まさかあかつからはやひ

正勝吾勝勝速日

あめのおしほみのみこと

天忍穂耳命

あまてらすおおかみ すさのおのみこと

天照大神が素戔嗚尊と誓約を行つ

たとき、素戔嗚尊が天照大神の左の髪

に付けていた勾玉をすすぎ洗った時

に生まれた神です。神名は、「正に吾

勝てり」という意味です。忍は「大し」

穂は「秀」を表わしています。

天照大神は、豊葦原瑞穂の国(日本

の古名)は我が子の正勝吾勝勝速日天

忍穂耳命が治めるところであるとし

て、降臨することになりました。

天忍穂耳命が瑞穂国を見ていると、

瑞穂国は大いに乱れていたもので、しば

らく様子をみていました。その間に、

瓊瓊杵尊が生まれました。それで、天

忍穂耳命は天照大神に「私よりも瓊瓊

杵尊に統治させたほうがよい」と進言

し、瓊瓊杵尊が降臨することになりました。

歴史ウォークが 開催されました

五月八日、十五人の参加者が、薫風の中を歩きました。今回は「御霊信仰の里を巡る」と題して、井上内親王に
関係のある史跡や社寺を訪れました。
本宮では主に本殿の彫刻の見学をしたあと、満願寺を訪問しました。満願寺には井上内親王の本地仏である准胝観音をはじめ四体の観音が祀られています。それぞれ早良親王、他戸親王、火雷神の本地とされています。
次に日吉神社に行きました。日吉神社のある所は「御園跡」といわれ、井上内親王の花園があった所といわれています。

宇智郡で生んだとされる御子を祀ります。この御子は大きくなったとき、亡き母や兄が流されたうえに暗殺されたことを聞いて、悔しさや恨みで現身のまま雷神となりました。
雷神は京へ飛び、桓武天皇に「井上内親王、早良親王、他戸親王、雷神を神として祀る」と約束したので、雷神は「これよりは国家鎮護の神となる」と言つて、現在の火雷神社に鎮まりました。
井上内親王、早良親王、他戸親王は御霊神社本宮と一緒に祀られています。火雷神は御山に祀られています。これは、御山に井上内親王陵があるので、母の墓を守るためだということです。

この日は曇り空でしたが、直射日光を受けることがなく、歩くにはちょうどよい天気でした。風もゆるやかにあって、心地よいウォークになりました。次回は十月に、久留野町を歩く予定です。

ティータイム講座を 開催します

五條文化博物館では、市内の歴史や文化にふれるイベントを開催します。そのうちのひとつ「ティータイム講座」では神社に関する講話を行います。今回は「御霊信仰」をテーマに市内に十三社に分かれた謎を探ります。
○ティータイム講座
五月三十日(日)午後二時～三時
場所 博物館研修室
参加費不要。ただし入館料三百円要
問合せ・申し込みは博物館受付専用ダイヤル(30) 4761まで。

Instagram @goryohongu
Twitter @goryohongu




#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。
公式ホームページ
<http://goryojinja.or.jp>



娘がコロナに？

娘が「甲状腺が晴れているような気がしているので病院に行きたい」と言いました。おたふくかぜ？ 熱はないとのことだったので、単なる風邪気味だろうと思いました。
病院に行つて体温を計ると、微熱があると言われ、院外に出されました。これはコロナか？と思いました。さて、どの部屋に隔離しようか、家族はどう対処しようかとか、あれこれ考えました。その前に保健所に連絡して、指導を仰がなければ、とも考えました。
しばらく外の風にあたってから体温の測定をすると、平熱に戻っていました。体を動かしたことによる体温の向上であったようです。診察によれば、やはり風邪の症状のようです。
なにはともあれ、とにかく、ホッとしました。コロナにかかわらず、病気に罹らないことが一番です。

日本書紀にみる

十一代垂仁天皇(五)

七年秋七月七日、お傍の者が申し上げました。

「当麻邑に勇敢な人がいます。当麻蹶速といい、その人は力が強くて、角を折ったり曲がった鈎を伸ばしたりします。人々に、『四方に求めても、自分の力に並ぶ者はないだろう。何とかして強い力の者に会い、生死を問わず力比べをしたい』と言っています」と言いました。

天皇はこれをお聞きになり、群卿たちに詔して、「当麻蹶速は天下の力持ちだという。これにかなう者はあるだろうか」と言われました。

ひとりの臣が進み出て、「出雲国に野見宿禰という勇士がいると聞いています。この人を蹶速に取り組みさせてみたらよいと思います」と言いました。

その日に倭直の祖、長尾市を遣わし

て、野見宿禰が呼ばれました。野見宿禰は出雲からやってきました。

当麻蹶速と野見宿禰に角力(相撲)をさせました。二人は向かい合って立ちました。互いに足を挙げて蹴り合いました。野見宿禰は当麻蹶速のあばら骨を踏み砕きました。また、彼の腰を踏みくじいて殺してしまいました。

そこで当麻蹶速の土地を没収して、すべて野見宿禰に与えられました。



これが、その邑に腰折田(山裾の折れ曲がった田)がある由来です。野見宿禰は、そのまま留まってお仕えしました。

十五年春二月十日、丹波の五人の女を召して後宮に入れました。一番上を日葉酢媛といます。次を淳葉田瓊入媛といます。第三を、真砥野媛といます。第四を薊瓊入媛といます。

第五を竹野媛といます。

秋八月一日、日葉酢媛を立てて皇后とされました。皇后の妹の里三人を妃とされました。

竹野媛だけは不器量であったので、里にに返されました。その返されることを恥じて、葛野で自ら輿より落ちて死にました。それで、その地を名づけて墮国といます。今、弟国(乙訓)と呼ばれているのは、それが訛ったものです。

皇后である日葉酢媛命は三男二女を生みました。第一を五十瓊敷入彦命といます。第二を大足彦命(景行天皇)といます。第三を大中姫命といます。第四を倭姫命といます。第五を稚城瓊入彦命といます。

次の妃である淳葉田瓊入媛は、鐸石別命と、胆香足姫命とを生みました。

その次の妃である薊瓊入媛は、池速別命と稚麻津媛命を生みました。
(次号につづく)

万葉の花たち

しだくさ(ノキシノブ)

わが屋戸の軒のしだ草生ひたれど
戀忘草 見れど生ひなく
柿本人麻呂歌集(巻十一・二四七五)

「私の家の軒にはシダ草は生えているけれど、恋を忘れさせてくれる忘れ草はまだ生えてはこない」

万葉の時代、大和



はシダに被われていたといいますが、シダを詠んだ歌は二首しかありません。花が咲かないことが理由でしょうか。

「我が家の軒のシダクサはいくらでも生えるのに、恋の苦しさを忘れさせてくれるという恋忘草は全く生えてきません」恋を諦める歌ではなくて、どうかしてよという相手への嘆きのラブソングなんだそうです。